

COSMOS集



夕暮の五時を知らせる鐘の音あまたの重機いつせいに止まる

沸き立つ 榛原 みよ子*埼玉

好物の煎茶のみやげ手に下げて孫がひよろんと玄関に立つ
弁慶と紐女づめと翁の「曳つかかせ」囃子と舞にまなこ見ひらく
おちこちに絢爛な山車並びいて過去と現在未来が沸き立つ
三人の話は溢れ米、気候、体調、熊、家事、食事進まず
穏やかに安らぐ季は短くて月は十六夜はや雪便り

香り 鍋 秋山 幸子 千葉

マラウイのコーヒー豆が届く朝「パンゴぶつくり」気分一杯淹れよう
沈む陽の置き土産なる茜色に抱かれたくて足早にゆく

秋田では香り鍋と言ふきりたんぼ牛蒡とせりに舞茸入れて
静かなる独り居の部屋に響きゆくボンボン時計の優しき音は
医療用ウィッグのために髪を切る誰かが母にし給ひしやうに

五十五年 前田 亜津子*神奈川

「渋谷スカイ」の屋上からぐるり眺めれば北に筑波嶺西には富士あり
線路沿いに遺跡のごとく残りたる渋谷の街の「のんべい横丁」
「戦争を知らない子供たち」の歌五十五年を歌い継げる幸さいち

給食の時間に脱脂粉乳を飲まされなかつた最初の世代
半世紀の時経て艶のいや増せり武道館で聴くジュリーの「サムライ」

水上 芙季選 「あすなる集」特選

引継ぎ 長瀬 慶一郎*福島

柏崎刈羽原発事故あらば我が福島は風下となる

高市さん、石破さんから国の事ちゃんと引継ぎ受けたのですか
仮想ごとを問われて話し過ぎたのか言葉は怖い消しゴムは無い
目力と太い地声の大役者仲代達矢さんが旅立つ
「動くなー、山は動かぬぞ」影武者の仲代達矢の名演なつかし

少しの秋 石川 妙子 群馬

香水の甘き香りがただよひてすれ違ふのは異国の乙女
朝空に羊雲見て夕空に茜雲見つ少しの秋に

スーパームーン一日遅れて顔出せば夫の背つつきて窓辺にさそふ
一年ぶりに結ぶネクタイ結び方忘れたと言ひ迷ふ夫の手

松尾 祥子選

青 になる 清水 美里*東京

最後までうまくいきたいわけじゃなし落としたイヤリングを探さない
親指にスワイプされるわたくしの名前を思うひらがなだけの
行列に並べない日の伊勢丹の栗蒸ようかん横目で逃がす
缶の開く音が聞こえて湯船からおかえりを言う疲れた人に
冬の花の匂いと思いいそれ以上何もわからぬまま青になる

新 そ ば 佐藤 多佳子 新潟

新そばを食べる店にて常連はまづ注文す厚焼きたまごを
赤塚の街道すちに大根を売る農家あり 五十円也
名産の赤塚大根おもと秋に太れり水分を貯め
近江牛、鯛さうめんがおいしくてまた行きたいな長浜あたり
でんとした赤い鳥居のお弥彦に菊のまつりの準備がすすむ

二 股 大 根 保田 仁美*富山

庭の木の色づく枯れ葉の風強く今にも枝を離れ飛び行く
透明な秋空に映える^{つるぎ}剣岳連なる尾根の稜線あざやか
時おりに香を焚きしめ白檀の香りに包まれ浄むるころ
若冲の涅槃図に臥す薄墨のお釈迦様なる二股大根
吹きすさぶ窓の冷たい雨音にシヨパンの調べが不安をほどく

朴 の 葉 大沢 律子 岐阜

朴の葉の春は朴葉ずし秋なれば落葉の皿に焼秋刀魚のす
草引くに山畑なれば熊来るや金太郎さんに護られたしよ
このごろの天気予報は吾に似て晴れのちくもり曇のち雨
子守唄独りの部屋に気兼ねなくうたひ微睡むねんねんころり
癒さるることはなけれどさしあたり漢字クイズに時忘れをり

ひとりあやとり 権田 陽子 静岡

〈初孫とふ奥の手を出し少年はハーゲンダッツを買つてとせがむ
そして誰もゐなくなるとの軽口が現実味を帯びいまや七軒
志戸呂焼きの首長の壺にりんだうを活ける母の背秋色まどふ
薄ら日のさし込む部屋の片隅でをはりの見えぬひとりあやとり
一年を一生とするカマキリと目の合ひしこと覚えておくよ

鈴木 竹志選

少年新美南吉 奥村 幹男*愛知

図書室の北側一番下の段ジュール・ベルヌもルパンもあつた
雑草はしぶとくしっこく根を残し秋の畑に夏が居残る
自家製のジャガイモ玉ねぎ茄子ピーマンあとは肉のみ俺んちカレー
全休符の小節ありて脳内のメトロノームは黙して進む
ランプから電灯あらわる時代相見つめし少年新美南吉

木彫りのキツネ 柴田有里*愛知

ウチに来る？我が家に誘いたくなつた木彫りのキツネ手のひらの上
陽のあたる樹だけあざやか秋の色世の不平等樹木にもあり
折り紙の売り場で探す今日の空 青の折り紙あまたにありて
ぐちぐちと愚痴を管巻く文面のLINEを送る夜更けの友に
出戻りの職場気遣う手土産の青いリボンがハラハラほどけ

末っ子 浦木妙子*鳥取

末っ子は七十過ぎても若いねと兄弟会は年功序列
得意気に義兄が吹きたるハーマニカ「青い山脈」輪になり歌いき
十連の西条柿の玉のれん鳥よけ銀盤虹色に揺らぐ
まちがいを七つ探せた時のよう洗い物済ませ梅昆布茶のむ
言えなくてストレス溢れるこの胸に青きシユレツダー一台置きぬ

祝部弘子さんへ 山野いづみ鳥取

ラーゲルの体験を詠み戦争の惨を訴へし祝部弘子さん
八十年経たる今でもラーゲルの悪夢を見ると言ひましましき友
九歳の祝部弘子は目に見えぬ三十八度線を裸足で越えぬ
自が歌集『アリアンの歌は唄はない』置かるる棺に友は眠れり
友の顔ちかくに花を捧げむと頬に触るれば花の冷たさ

日本の秋 樺か乃広島

ブレイキをかけよと娘の声のして買物籠よりメロンを戻す

何となく生きてきたんぢやないことを言はねばならぬ娘の背に
柿の木も枳殻の垣もなくなりて町内にさがす日本の秋
南天がちよんと色づきさあ冬へと誘ひくるる肌寒き朝
足の甲犬のお尻がでんとありて充電してゐるやうに温か
水上 比呂美選

木漏れ日 落合美代子香川

はじめの体験なのだ老いることわづかの段差にたたらを踏んだ
思ひ出の母の手料理聞かれたら「明治キンケイカレー」と答へぬ
卓袱台でかぞく四人の夕ごはん戦後の裸電球ひとつ
ホイールとタイヤのすきまに挟まつた細きくちなは摘まんですてた
さらさらとページめくれぬ木漏れ日をうけてベンチに座りたるとき

耳の内の月 尾花照子*福岡

花器の耳ほどのもろさの心もて秋のゆうべの交差路ゆけり
すりされる日の来ることを知りながら犬は秋野に遠吠えをする
鉄橋をわたる車両に立枯れた莢のごとくに身を鳴らしおり
老農はシャベルをさして夕闇にぬくみののこる軍手をひたす
秋冷に寝がえりうてば耳の内の月のひかりの沙がこぼれる

ロードレース 小松省己佐賀

ふるさとのロードレースにエントリー入れ菌外して孫らと走る
錦木は夕光うけてわが庭を真つ赤に染めてここだ散り敷く

にはさきに自然生えなる藁吾の花あさかげあびて黄金の赫き
メノポーズ週間に識るメノポーズ妻のメノポーズ知らず老いたり
日本の（非核三原則）を見直す高市早苗の貌、般若面

ひとりじゃないと 村上京子*長崎

嬉しいような哀しいような高齢者交通費助成のお知らせ届く
昔ならここは走っていたらもう若くない若くないんだ
口腔内崩壊錠とは知らず飲み込めないこと気にした薬
我々にナンバー付けて識別すマイナ保険証マイナ免許証



影山 一男選

「その二集」特選

おにぎり 棟方貴之*青森

行くのならスピカがいいな明るいしなんだか君の顔に似てるし
我が生は我のものなり おにぎりにおかかを入れて星形にする
白玉をモチモチ食べるその頬を永遠なれと祈る霜月
下の歯が抜けたと告げる六歳の眼に少し未来の兆す
初めての歯が抜けた日のことだつて覚えてるのよ父親だもの

出来るなら二十歳の自分に教えたい運命の人はひとりじゃないと
待つものある 永松 たづ子*大分

夏と冬のせまき間に香はみちて大き木犀ものがたりする
神無月某日庭に黄蝶まうゆくりなく来ぬわが齡喜寿
雨あけて朝刊を手にゆきあいぬ独りましろきスパームーン
ささやかな結果待つものある暮し山本勝つたか王鵬勝つたか
千の枝しだるる柿の老木にすがるその実の重たさ思う

時の積み木 水鳥葉子 茨城

たましひの透きとほるまで月見ればわたしの中に月は宿りぬ
秋夜長あたまの中の回線がひとつ外れて落ちる音あり
人はみなひそかな悔いを抱くといふ雨のおと聞く霜月の夜
思ひ出をたぐり寄せたる秋ゆふべ時の積み木を組み立ててゆく
おかつばで白タイトのわれ微笑める白黒写真 昭和はるけし
野うさぎ 山崎杜人*群馬

樟の葉のひるがえす太陽の像を映せる無人のベンチ

月光に許されながら砂浜はオフシヨルターの白さに満ちる
空き瓶のおおあくび覗きこむ秋をソファも空も着膨れている
夕焼けに楽譜くずれてカルテットの音符はすべて蜻蛉にかわる
野うさぎを胸に抱けば野うさぎはわれを野原と眠るだろうか

鳩サブレー 吉本美加*神奈川

初冬の光あふれる豊島屋の鳩サブレーみな左を向けり
満ち足りた暮らしのなかに皿並べ鳩サブレーを頭から食む
「おばちゃんはこの夏癌で死んだのよ」梅酒こんなに瓶に託して
梅の実にフォークで開けた穴八つ 数えてしまふな数えてしまふ
故郷より故郷みたいなこの町のパン屋の角に山茶花咲いた

十五時の空 小屋野優子*東京

たましいは渡り鳥なり萩そよぐ窓の向こうを眺めやるとき
涼やかな風を吸いこむ肺臓が「秋澄む」という季語を知りたり
真白なる三つの羊雲を生み懐広し十五時の空
掌に夕焼けの陽を受けるごと摘みとってゆくジュズサンゴの実
感傷をなだめる術を知らねどもココアの缶が指を温める

福士りか選

色のなき冬 多田玉青*東京

帰省する道を歩いてヒヨドリの声に我が家は近しとおもう
色のなき冬目前に雪国の紅葉は燃ゆる秋の夕暮れ

しずみたるまぶしき夕陽は晩秋のまもなくおわる紅葉にそそぐ
紅や黄に燃えたる山に迎えられ硬くなりたるころほどけり
紅葉の景色の奥にいたただきの白くなりたる大源太山見ゆ

丸く納める 小笠原麻美*新潟

お日さまと並んで歩く冬隣これまでのことはここまでのこと
神経の立つ夜味増溶き豆腐入れこの汁で今日は丸く納める
公式な力は持てぬ声ながら葦原の風と共に響けり
寝たきりの母がめぐらす網の目で世界を包みそつと離れる
トレンドの二拠点生活それぞれの故郷行き来す円満夫婦

ゆらゆら歩く 林あゆみ*新潟

猫を抱くように白菜抱えつつ鍋つゆ売り場をゆらゆら歩く
購入し到着までの一週間焦がれるようにこたつを待てり
加湿器の代わりに洗濯物干して暖簾のようにジーンズくぐる
何にでも感謝をしたくなるときは実はあんまり調子が良くない
快適をパズルのように組み立てる長袖半袖加湿に除湿

闇に寛ぐ 田島祥恵*長野

陽は落ちてネオンは青し走り行くバスの車中の闇に寛ぐ
庭に鳴く鳥の声ごえ遠く近く冬に備えて餌を捜しおり
バス停に学生笑いさざめきて晩照を背に影を踏み合う
夕暮に髪を洗えば迫りくる闇の間にシャンプー香る
障害を抱えつつ折る白き鶴リハビリ室に冬陽は温し

雲出川の音 鏡 康 男*三重

終着の昭和のままの奥津宿屋号のれんが風に膨らむ
一駅を過ぎて夕陽の沈みたり名松線は山あいに入る
ホーム発つ窓が故郷を離しゆくまだついて来る雲出川の音
街路樹のいろどり透かし木枯らしは季節の扉ひらいて行けり
山茶花のはなびらこぼし垣根より小春日浴びて小鳥飛び立つ

田中 愛子選

だ い す き 尾 上 陽 香*兵庫

美しいものは留めにくいものか蜘蛛の巣の露ゆうぐれの雲
蜂蜜を一匙足してカフェオレは私の夜の特別となる
コロッケになってしまえばジャガイモは土を忘れた顔をしている
だ い す き と 伸ばされる腕の柔らかさこのだ い す き は 期 間 限 定
声変わりした吾子の声を探す耳合唱を聴く保護者その1

最 後 の 角 八 木 かおり 奈良

ふり返りふり返りして手を振つて最後の角は両の手を振る
とつぷりと暮れたお山に見え隠れする狐火は峠ゆくバス
迷ひ蛾と私のふたりきりである エレベーターの15秒間
別々の思ひ出をもつ者どうし月に一度の歌会に集ふ
乗客をすべて降ろして空つぽのバス帰りゆく大和路の夕

風 山 添 聖 子*奈良

徒競走一番前で駆けてくる吾子の通ったあとに吹く風
アンカーにバトンが渡る瞬間の体操服の白の眩しき
それぞれに風をまといて駆けてゆく六年生のアンカーの子ら
子と二人金木犀のシロップを煮詰める夜の内緒の話
窓側の前から三番目の席の吾子をとときき隠すカーテン

黒 の 時 代 稲 田 ひとみ 香川

夕暮れに我のまなざし沈みゆく言葉の棘を抜けずにゐます
百一歳「おこわがすき」と言ひながら長く生きすぎとぼつりとこぼす
スキップができたと動画送られて画面のむかう君がまぶしい
ひまはりも糸杉もなき(大ゴッホ展)黒の時代にひとり真向かふ
もしかしてゴッホは蟬であるまいか地中を出でて一氣に花開く

祖 母 の 枕 敦 田 真 一 宮崎

介護士のちひさく泣きて去りにしに祖母の枕のしろたへさやか
はやりをのわづかにをればちはやぶる神楽の鈴のとほきより降る
投票を終へたるのちの外食をする店もなく三十年過ぎぬ
ドンキにて螺子を購ふ週末にわれひとりなる住基を思へり
ぬばたまの黒霧島の滴りはわかき真竹のうつはをつたふ